

大学論集

第15集 1986年

〈特集〉

大学の国際化と外国人留学生

—アジア高等教育国際セミナーの記録—

広島大学
大学教育研究センター

留学生十万人計画

木田 宏*

十万人計画の意義

みなさんの紙袋の中に、この「21世紀への留学生政策」が入っています。これは文部省でとりまとめたものですから、この席に出席しておられる留学生課長の雨宮さんが説明されるのが一番いいのですけれども。しかし、このペーパーには私も関係しましたので、その構造だけ、私から御説明しておきます。第一編、第二編と二つに分かれておりまして、第一編が「21世紀への留学生政策の展開について」と、その要旨、第二編が「21世紀への留学生政策に関する提言」と。その要旨となっております。そのあとに、参考資料がくっついております。実は、作られた順番からいきますと、第二編の「21世紀への留学生政策に関する提言」の方が早いのであります。昭和58年8月31日に提言された、その懇談会に加わりましたメンバー5人、その中に私も入っているということから、こういう席にお招きをいただいたのだと思います。その目次がありますように、留学生問題について当時、関係者が意識しておりましたことが全部この中に書いてあります。そしてこの目次の資料というのは、ほぼその時に使われた資料、若干これ、補正してあるのでしょうか、その辺はあとで課長さんがお話しになると思います。この提言を受けまして、この第一編の方が後から出来たわけでありまして。「提言の展開」とこう書いてあるわけでありまして、留学生政策の展開として必要なことを議論いたしまして、約1年程あと、59年の6月29日に「展開について」がまとめられました。これは主として、その留学生政策としてこの学術国際局の立場、留学生課の立場で、現実に十万人をというふうに数字の上で考えていくとか、施策をどうするかというようなことが書いてあります。最初のこの5人の懇談会で議論いたしました時にも、10万人という問題意識はあった訳ではございますけれども、それは問題意識でございまして、現実の施策として煮詰めた話ではないのでございます。ですから、もっと一般的に思いついたことがいろいろと書いてある。こういう中味でございます。

その、せっかく配られておりますペーパーを元にしながら、与えられました20分間で、ごく簡単にペーパーを御覧いただきます時のポイントのようなことを、私からお話しをしまいたいと思います。

1 計画の概要と留意点

まず、「十万人計画」というのが、このセッションのテーマでございまして、その「十万人計画」というのは、どういうふうに構想されているか、ということをおとからできたこの具体の計画ですが、4ページのところに、その表が出てまいりますので、それをちょっと御覧おきいただきたい。これは1983年(昭和58年)を起点にいたしまして、この時に留学生の数が1万人であったものを、21世

* 日本学術振興会理事長

紀の2千年に10万人にするという枠組みでありました。その中間に1992年という年が、約10年たったところでこのくらい、という見当をつけて書いてありまして、10年たったところで4万人、それから、あとの約8年たったところで10万人。こういう並びになっておるのであります。その最初の10年間には、留学生の数が16.1%ずつ増える。そして後半になりますと、母数が大きくなっているものですから、12%ずつ増えて10万人。これはべつに、こういう見通しになるっていうよりも、10万人という目標を設定しておいて、そこへはめ込んで、多少とでも reasonable な数字とすると、このくらいに割り振れるんだらうということでございます。

(1) 国費留学生の比率が低下している

そこで御注意いただきたい点は、実は、その58年時点におきます1万人の中では、その表に書いてありますように、国費が2千人、私費が8千人という数字になっております。ところが、この国費と私費の割合は、段々、段々、私費の割合が多くなって、国費の割合が少なくなる。ですから、国費は1万人、2千人が1万人になるという、5倍に増えるという訳であります。私費の方は、8千人が9万人になるというわけでありまして、10倍強に増える、こういうプロポーションであります。

昨日からのお話しを伺っております。何か、10万人全部、国費で日本政府が招待するような、そういう御議論が出ておりました。事実、これは外国にはそのように伝わっておるようでございます。こないだも、ある私立の大学の学長さん方と会って、話しを聞いておりましたら、中国から大変大きな視察団が大学にいられて、「今度は10万人呼んでくれそうだから、中国からもこの大学に何人呼んでくれるか。」と、こういう質問が出た。尋ねられた学長の方はびっくりいたしまして、「そんなこと、考えておりません。」という答弁をしたのだそうですけれども。中曽根総理の10万人というのは大変 world wide に声が轟きまして、中曽根総理が10万人呼ぶと、みんな国費で呼ぶ、というような印象になっておるようです。そこはちょっと御訂正をしていただきたい。

そして、この国費は5倍しか延びないが、私費は10倍延びるところも、この計画の大変重要なポイントであります。考えようによると、いろいろ考えることができるわけでありまして。要するに、増えるけれども日本の政府は少し手を抜きます、ということをごに言っておるわけですね。しかし、手を抜きます、というと非常に悪いように聞こえますが、大体当たり前でありまして。日本に勉強に来たい人が増えれば増える程、私費が大きくなるというのは、当然のことなんで。今のように、2割近く国費で、政府が政府のお金で留学生の2割を呼んでいるという国は何処にもありません。みんな、勉強に行きたい国に自分が手弁当で勉強に行くというのが留学の基本でございます。相手の国が呼んでくれるから行くという留学っていうのは、国の政策としてある範囲はそういうことがあるにしても、しかしそれは恒常的な留学制度というものを考える場合には、決して本質的なものではないわけです。

恒常的な留学制度ということを考えれば、ほっておいても、世界の国々から勉強に来たいというような大学がそこにある、だからどうしてもそこに勉強に行きたいんだと言って、みなさんが集ってくる、こういうふうにならなければ本物ではないわけです。そういうふうを考えますと、約これから十数年かけて日本の大学が本物の大学になって、世界の人々がほっておいても集まって来るような大学にしたい、という願望がある、こういうふうにごにこの数字は受け取っていただきたいのでございます。

(2) 大学院よりも学部の留学生の比が高まっている。

次に、その表の中にも、右の方の表ですね、5ページの表を御覧いただきますと、今度は大学院と学部、高等専門学校シェアがここに上がっております。ちょっと続みにくいかもしれませんが、一番上の列が1983年の実績でございます。それが21世紀に下のようにあらまほしい。あらまほしいのかどうか、推測も入れてこのくらいに構想してみようという考え方でございますが、そうしますと、その大学院と学部のシェアというのが、大学院は割合からいうと若干小さくなる、ということなんです。現在は3,900人というのが大学院レベルの数でございます。大学院レベルの合計の一番上のところに、3,900人。それが21世紀にはどうなるかと言いますと、3万人になる。こういうわけでございますから、大体8倍になるというわけでありまして。大学院は8倍になる。ところが、学部の方は、現在5,600が6万人になるというわけでありまして、これは約11倍程に増える。そして更に沢山増えますのが、一番右の合計欄のすぐ近くに書いてある、高等専修学校、高専専修学校、主として私立、と書いてありまして。これが現在800人であるのが1万人っていうことでございますから、これは12倍に増える。そうすると、一番増えるのは専修学校、割り合いの上では専修学校が増える。確かに文化服装学院というような、新宿にあります、あの専修学校を見ておられますと、もう喜々として、アジアの各国から沢山の留学生が来て、実技の勉強をしております。その日本語のトレーニング・コースというのは、日本の大学の日本語コースよりももっと上手に intensive にやっているという実態もございまして、ここの所が評判が高くなるということは、ある程度わかるわけでございます。

しかし、これが一休いいのか。私が先程言った、ほっといても日本に勉強に来る留学制度として、これがいいのかということについては、皆さんに御批判を頂き、お考え頂かなければならんかも知れません。大学院よりも学部が多くなるということは、本当に、実態に合っているかどうか。昨日でしたか今日でしたか、中国からの御発表にありましたように、実は「今後の中国からの留学生は修士も少なくなって博士ばかりになるであろう」という御報告がございました。そこへ日本政府は、「いや、大学院の方は少なくなって、学部が増えて。それよりもっと、実技的な高等専修学校の方が、外国人の留学生としては急速に伸びるんだ」という、こういう日本の留学制度というものは、「それでいいのか」とこう言われますと、いささか、「はい、結構でしょうね」とこう私が言うのにも、少し舌がもつれる点があるのであります。

しかし、現実はどうなっているのかという、実は驚いたことにですね、この59年、60年、要するに1984年、1985年のデータは、この予測の通りに急激に伸びている。undergraduateの方が、沢山伸びておるわけでありまして。ですから、私はいささか、この2ヶ年の実績にオヤッと行って、考え直しておるところなんでございます。しかし、日本の留学政策として、そういうことがいいのかどうかというのは、論議をして頂くひとつのポイントであります。

そんな調子で話しておりますと、時間が全く足らなくなるんですが。

それから、もうひとつ。この表の中には、国立学校で今、かなりのものを引き受けておるんですけども、私学に沢山引き受けてもらおうという構想が入っております。国立大学はかなり沢山、現在、特に大学院の学生の8割ぐらいを、国立大学で受け取るかと思っております。ですから、増やす時に、国立で増やすというのは、現実、仲々難しいっていうのが、政府当局の判断であると思うのでございます。私立の大学で沢山引き受けてもらおうという構想が、この中に一緒に加わっておるわけでございます。

私費で私立の大学により多く入ってもらおうという前提で、これが出来上がっているということ、ひとつお考えおきを頂きたいのであります。それが今後どういうふうに移すか、施策としてどうすればそういうことになるのか、というのは問題がいろいろとあろうかと思ひます。

Ⅱ 大学における受入体制

第二に、大学における受入体制で、どういうことがあるか。これは既に昨日からいろいろと御体験に基づいていろんな御発表があって、スピーカーがおっしゃったこと以上のものはございません。問題点は、既に昨日からの御発言でみんな出ておると思ひます。このペーパーの中にも、うしろの方の、最初にまとめました「政策に関する提言」という懇談会の資料の、後半の、4ページ、5ページ、「留学生受け入れの問題点」というところで、一応、当時関係者が気にいたしましたことが全部挙げてございます。

日本へ来ると、まず何よりも経済的な負担はかなり大きい。特に昨今のように、円の為替レートが急速に2割も上がりますと、留学生経費はいきなり、2割ジャンプするわけでございます。それは、仲々容易ならんこととあります。ショーラックさんの午前中の御発表には、「アメリカが、留学するについて、実は学費が高い」ということを気にして書いておられました。実は、日本もアメリカに比べて、負けにくい高いんです。ですから、東京に学生を、自分の子どもを東京の大学に入学させるぐらいなら、アメリカの州立大学に送った方が安い、というのが段々日本の国内でも常識になりつつあります。まして、ヨーロッパの大学に行けばもっと安い、というわけですから、この経費の点から言うと、アジアの各国から沢山来て頂きたいけれども、かなりこれはコスト・アップになっているという現実がある。それは、今後の政策でどうするかという大変大きな問題でございまして、それがまず第一に書いてあります。

それから、日本語の問題。これはいろいろとありますから、私が具体的にお話しする必要もございません。

学位の問題。これも問題でございまして、学位の問題は、(ご参考にこのうしろの資料だけちょっと見ておいて頂きたい)日本でも、少しいい学位が出るようになってきているという、学位の出し方も決して悪くないとおっしゃっていますが、一番うしろの資料の14ページのところに、「留学生の学位の取得状況」と同時に「日本の中の学位の取得状況」というのが併せて表になっております。この表は、是非ひとつご覧おきを頂きたいのであります。

ご覧になりますと、「留学生の学位取得状況58年度」で文化系の博士のところを見て頂きます。修士は大体96%、99%と、皆さんが修士の学位をとって進学をされるわけですが、博士のところに行きますと、文化系が19%、理科系が79%と、こういうことになっております。人数で、これは63人、こういうこととございまして。これでも少ないという言い方もあるかもしれませんが、実は、留学生に対する文化系の学位は、日本の国内の学生よりも大変沢山出ておるといふのが、その下の表との比較でおわかりになるのであります。下の表は日本人学生、留学生も含めた日本の大学の学生全体に対する、博士の学位の授与の数字でございまして、57年度でとりますと、文化系はわずかに4%であります。留学生がこの中で11人おるわけとありますから、それをとってしましますと、日本人学生は、これも昨日どなたかの御発表の中に、「東京教育大学に50人、ドクターコースにおったがひとりも博士をも

らった者がいなかった」という御説明がございましたが、そういう状態であります。

これはなんとしても困るということ、国際交流を考えてる者はみんな意識しておいて、そしてことあるごとに日本の沖原学長をはじめですね、大学の先生方に、「こういうことでは日本の国際化なんて言ったんじゃおかしいですよ」ということを言っておりますけれども、大学の先生の意識というのは仲々改まりませんのでね、舵がとれないのです。これは留学生だけでなく、国際問題を考える時に、あらゆる所で問題になります。

私どもの日本学術振興会が日本の若い研究者を海外に送り出すとき、東大の助教授であってもですね、ドクターを持っていないと向こうではリサーチ・フェローとして受け取ってくれないことがあるんです。汗をかきましてね。「いや、これは東大の助教授なんだ」とこういって言ってもですね、「だってPh.Dもってないじゃあないか」というので、大変手間がかかるんです。そうするともう、まだPh.Dも持って来ていないドクターコースの学生ぐらいにしか扱ってくれないという大変困った問題を、目前にいっぱい抱えております。

ですから、今日この席に大学の先生方、特に人文系の先生も沢山いらっしゃると思うんですけども、人文系のドクターの扱い方については、日本の頭脳をこのために大変安く評価し、損失を与えているという意識を持って頂かないと困る。別に留学生にだけいい顔をしてくれ、というふうに申し上げるつもりはございません。寧ろ、これで損をしているのは日本の優秀な学生である。御自分が持っていないからドクターをやるのはちょっと差し障りがあるという意識を改めてもらわない限りは、この国際交流というのは具合が悪い、という問題があります。

(II) 教育内容

もう、時間が段々なくなりつつあるんですが、実は、学費に絡んで教育内容というのが問題であります。

これも、今朝のどなたかの発表の中にございました。ショーラック先生だったかな。「日本へ来て、日本の大学の講義で、知的に刺激を受けるということは殆どない」と書いてありました。しかし、まさにそうなんです。

というのは、これはヨーロッパの大学と日本の大学と似たようなところがありまして。アメリカの大学が新しい、contemporaryな問題にグッとシフトして、情報科学とか何とかというところに進んで行けば、そちらへカリキュラムがシフトする、あるいは学科の構成がシフトする、managementといえはmanagementにシフトする。ところが、日本の大学のカリキュラムは、学科の構成も含めて仲々そういきません。そこで、実は、留学生で日本に來られてこういう先端のことを学びたいと思っても、日本の大学はそういうふうになっておられない。そして日本の大学は、伝統的なところほど、大学院の学生に対して指導するというようなことをアメリカ式にやらない。ヨーロッパ式にやらない。占米の伝統がありまして、ついて来たい者はついて来い、というふうに先生だけこっち向いてトットと走って来まして、学生がついて来るか来ないかについては殆ど構わないという教授法をとっております。学部までそういう教授法になっておりますから。

そこで、他所の国から来た学生さん達は、「日本の大学へ行っても教授は構ってくれない」「教えてもらうべきことも教えてくれない」という意識になりがちであります。これは大変問題なんでありまして。「何の為に來たんだ、日本に來てもつまらんからもう一度アメリカへ行こうか」という話しは

沢山聞かされる訳であります。

ですから、こういう点を直していかなければ、勉強にきたい人の中味にできていないという状態が続いたのでは困るな、というふうに考えております。こういうことも、井門さんその他いろいろと御発言の時に、「うちの大学はもう、そういう段階を脱したんだ」というふうにおっしゃって下さるでしょう。そういう大学が出来つつあることを期待しておるわけでありまして。ちょっとヒマがかかるのですね。その間、留学に来られる各国の方々には私達はどういうことをお願いしたいかといいますと。日本の、海外に留学生を出して勉強した、過去の歴史を考えますと、べつに中国が古い頃に、唐の時代に、日本向きのコースを用意してくれたわけではないんです。中国の文化は中国の文化で勝手に栄えておるのであって、そこへ勉強に行くのが、必死になって歯をくいしばって難しい中国語を勉強しながら我々のものにしてきた。明治からこちらのことを考えてみましても、べつにヨーロッパの国が日本人向きに、知りたいことを教えてくれるという学校があったわけじゃない。それを乗り越えてきた。日本が素晴らしいものをもし持っているとするれば、そしてそこへみなさんが魅力を感じて来られるとするれば、どういふふうに勉強するかというのは勉強に来る人の責任の問題である、ということ、かなりの程度私は強調しておきたい。

しかし、それだけ言っても駄目だというのは、私が先程申し上げた通りでありまして。来てみたら空振りだった、新しい情報科学というのは、昨日も表を示してフィリピンの方が説明して下さいましたね。情報科学を勉強したいのは、たったひとりしかいないじゃないか。そういう状態は、実は、情報科学を勉強するという体制が日本の中になくということと、相応しているのです。最近10年間、一生懸命になって情報科学も増やしました。増やしましたが、一番伝統があるのが法学部、経済学部、そして工学部。その情報科学という interdisciplinary な学部というものを端的に捕まえるとか、management とか、earea study だとか、こういうのはごく新しいんです。今日でも、そういうことを真剣にやって研究を伸ばすという体制が、残念ながら多いとはいえない。全部の大学がそういう方向にシフトすればいいとは、私は思いませんけれども。しかし、もっともっと contemporary な必要ということに、知的な魅力というものが対応していくというふうになってなければ駄目だ。そういう意味では、考えなければならぬことが沢山ある。これは、実は役所が言っても仲々仕方がないんです。大学の先生が自分で考えてもらう以外には対応のとりようがないわけですから、私はこういうセミナーで、パネルで各国の方々から日本のアカデミックな先生方の前に、遠慮のない注文を出して下さいることがよろしいと思います。

後、もう時間が足らなくなってしまいました、宿舎の問題だとか、あるいは日本語教育の問題だとか、いろいろと取り上げなければならない問題点が一杯あるのですが、もう、ここで時間切れになりましたから、私はまずその程度のことを申し上げておきまして、あとはこの資料の中に、いわば全部書いてありますし、具体の施策のことは、文部省の課長さんがみえておりますから、私ではなくて、雨宮さんから説明してもらえらるうと思っています。どうも、御声聴、有難うございました。

時間がありませんので、今の先生の御意見にお答えするという事じゃなくて、私は、そういうの

もふまえて、ひとつ付加えさせて頂きたい。

いろんな意味での、偏見がある、というのは日本だけの問題ではない。何処の国へ行っても、それなりに大なり小なり、他所の国の人と全く同じように活動できるという国は、私は、地球上にはないと思っております。しかし、その壁を少しずつ低くしていくということが、世界人類の大きな課題です。特に、日本や韓国のように単一民族の国というのは、その壁が殊の外大きいだろうと思います。ですから、そう簡単に直る話ではないのですけれども、少し時間をかけて、気長に、やっぱり、壁を低くしていく。そして、その中にある民族や人種の偏見というものをなくしていくという努力は、この留学生問題等を通じてお互いにやっていかなければならないことだと思っております。

その意味では、外国に対する知識が、従来、日本の大学、初等、中等教育全部含めて、欧米に偏り過ぎていた。それは、そうなんです。やむを得ない歴史的な経緯がありますので、そのことを少しずつ直していかなければならないということは、私ども、感じているところでございます。

時間もありませんので、そうしたことに長々と話していく余裕はございませんが、ご参加頂いているアリフィン・ベイ先生は、戦時中の南方特別留学生ということで、戦時中、大変困難な時期に、しかも原爆の落ちた時期に、この広島にいらした。ところが、不思議なことに、この戦時中の南方特別留学生で、しかも最終段階で、非常に窮屈な時に、日本におられた留学生の方々が、一番多く日本に対して強い親近感を持っていらっしゃる。そのことについては、実は、日本人の研究者ではなくて、アメリカのカリフォルニア大学の研究者が、大変興味を持って、一人々々追求して、「なぜ、あの時に、あんなひどい状況で、日本に来ておられた特別留学生が、そんなに日本に対する愛着をもっているのか」という研究も進められます。私は、たまたま、東京でそのお話を聞きまして、感銘を深めたのでございますけれども、留学の基本的問題というのは、そういう困難な中であっても一緒に人間的な苦しみを耐えて分かち合って戦時下に生きた、という、そのところに素晴らしいものが生まれたんだと思います。

ですから、私は決して失望することはない。いろいろな方々が、まずいことも沢山起こりましたけれども、なおあいう苦しみの中で愛着が広がっていくという可能性を、そして、そういう日本に対する理解者を持ち得るという、事実がある。日本の我々に対しても、われわれは自信をもっともっと持っているのではないか。

今日、いろんな意味での御指摘もございましたけれども、もうひとつ、そのことについて、外国の方の証言を申し上げます。つい3年程前に亡くなりましたロゲンドルフ神父さん、あの方が亡くなられた後、「異文化の狭間で」という本を残されまして、私も読ませて頂きました。その中に、あの方の兄弟は牧師さんですから、世界中で、いろいろな所で仕事をしておられるのですけれども、そのロゲンドルフさんが、御自分の体験と、それから兄弟の、ブラジルやインドやなんかいらした兄弟の体験を通じて、「日本人ほど卒直で、しかしshyで、しかし尚かつ信頼できる人はいない。いろいろな国の人と付き合いはしておる我々の兄弟が、身をもってそのことは確信をしていることだ。口下手で、あまり上手に自分を発表しようとしな。しかし本当に付き合い合った時に、こんなに誠実な人というのは私は知らない。」ということをして、「異文化の狭間で」という本に書き残して下さった。私は、これは大変嬉しいことだと思うわけでございます。

ですから、いろいろと至らない点は沢山ありますけれども、しかし、私どもは、こういう付き合い

を広げていくという努力を広げることによって、やっぱり望ましい方向へ、少し長い目で見ながら、進んで行くことが出来るのではないか。戦前の留学生は、一面で言うと失敗であった、と日本の研究者もいろいろと紹介しております。しかし、にもかかわらず、それは30年、50年で簡単に成功するというような簡単なものではない、ということを考えながら、お互いに努力をしたいものだなというのが、私の最後に申し上げたい一言でございました。有難うございました。